

卵との距離



kuresaki

from cage

長い長い、手を繋ぐだけの清廉潔白なラインを飛び越えた朝。貴方は消えて、代わりに粘液を薄くまとった卵を産み落とした。

シングルベッドの布団の中、私は裸で、床には二人分のバスタオルが落ちていた。私の部屋。昨日、貴方と一緒に帰ってきた私の部屋。陰部に違和感を感じ、少し下腹に力を込めると、ぼろっと丸いものを産んだ。白い鶏卵くらいの大きさで、体温を持った卵だった。私が産み落とした。

動揺。

貴方はどこかへ出掛けたのだと、あるいは自宅へ帰ったのだと思い、思い込み、思い聞かせ、卵はとりあえず水道水でよく洗い、冷蔵庫へ仕舞い込んだ。他にどうしたらいいのかわからなくて。手はじわりと湿っていた。

出勤の時間が近づいていたので、私は急いで出かける準備をした。床に落ちていたバスタオルを拾い上げ浴室へ行く。浴室といっても狭いユニットバスだ。シャワーを浴びながら昨晚の貴方の肌を思い出す。ありありと思い起こせるのに貴方はいない。右手で首筋に触れる。貴方のくちびるもそこに触れたはずだけど、それは、夢ではないはずなのに。湯気がこもった浴室で、歯を磨き、顔を洗った。目はきれいに冴えた。バスタオルで体を拭く。これは貴方が使ったものだろうか。二枚のバスタオルは洗濯カゴに放り込んだ。タンスを開け、下着を取り出して身に着ける。服を着て、化粧をする。鏡に映る女は目が潤んでいるように見えなくもない。口紅をティッシュオフすると朝食は食わずにパンプスを履く。気付く。ドアには鍵はもちろん、チェーンまでかけてあった。けれど、気にしないことにする。電車の時刻まで、あまり時間がない。

仕事はあまり捗らず、上司には嫌味を言われ、貴方の手の温度を欲しながら帰路についた。そう、今日は一日ぼおとしていた気がする。書類の束を落として順番をバラバラにしたり、コーヒーを出す分に対して少なく淹れてしまったり、昼休みはごはんを食べる気にもなれなくて、自動販売機でカフェオレのボタンを押そうとしたのに隣のブラックコーヒーを買ってしまったり。休憩時間で少しでも寝たほうが良かったのかもしれない。久しぶりに飲んだブラックコーヒーは苦味を強く感じた。合間合間に昨晚のことを思い出そうとしたり、貴方の手を思い出そうとしたり、フラッシュバックのように貴方の声を思い出したりした。パソコンのディスプレイに貴方の名前を並べていたりした。定時になり貴方にメールを送った。返信はない。毎日のことなので特に何も考えなくても家には帰れるから、それが幸いか災いか、電車の中で貴方のことだけを考えていた。電車は揺れながら家のある街へ向かう。

自宅に帰り着いて、鍵を取り出し、差込んで捻り、ドアを開けて滑り込み、今度は閉めて、パンプスを脱ぐのは無意識のままスムーズにおこなえる。そのひとつひとつの行動に昨日の夜を思い出そうとしながら、意識しながら、半分途方にくれながらパンプスを下駄箱に片付けた。

キッチンへ向かい、明かりを点け、冷蔵庫の取っ手を握って開けて、卵に向かい「ただいま

」と、話しかけた。それはその時の私がいかに自然におこなってしまった行動だった。ぼたぼたと涙がこぼれたので、とっさに冷蔵庫を閉める。胸が、きゅっと、苦しい。ぺたんと床にへたり込み、涙があふれるままに。肩からバッグをずり落としながら、私は、泣いた。

貴方の手が欲しい。手の温度が欲しい。貴方が、貴方、が。

そのあとのことはあまり覚えていない。気付くと、私は冷蔵庫の卵を両手のひらで包み、眠っていた。ベッドの上だった。服は帰ってきたときのまま、バッグはベッドの脇に置いてあった。卵は手からベッドの上に、ころりと転がった。

卵は貴方だった。

卵は何も語らないし、語れないし、自ら動くことさえもできないし、だから意思表示なんて出来なくて、きっと私以外の誰にも判らないけれど、卵は、貴方。私を導いてくれる。

私は貴方にくちづけをする。冷蔵庫で存分に冷やされた貴方はひんやりと応じるのだけれど、私にはそれさえも温かい。

卵と私との生活が始まった。

出かけるとき、貴方は冷蔵庫に入る。そっと冷蔵庫の扉を閉めるようにした。帰ると冷蔵庫から貴方を取り出す。冷蔵庫に半日眠っていた貴方は冷気を放っていたけれど、私のことは受け入れてくれていた。私は仕事以外で出かけることが極端に少なくなった。いつでも貴方の傍にいたくて。貴方は喜んでくれていた。狭いこの部屋で、私たちは殻を隔てて愛を育てていった。

一緒にドラマを観て、思うところを話しかける。貴方はにこにこして聴いている。ラジオをオンにすると、くすくす笑いを押し殺しているのが判るので、代わりにラジオ局へメールを送ってあげる。音楽をかけると穏やかになるけれど、私がハナウタを歌うと不機嫌になる。お風呂のときは「ちょっと待っててね」って、冷蔵庫に入ってもらおう。ときどき顔を近づけると、どぎまぎしている。私がかくちづけするかもって思うんだって。

けれど。

長くは、続かなかった。

貴方はある日、割れてしまった。違う。私はある日、貴方を落として割ってしまった。

その日は疲れていた。ふらふらしながら帰宅し、でも早く貴方に会いたくてキッチンの冷蔵庫前に行き、扉を開けて、取り出そうとして、手が滑ってしまって、貴方は床に落下していった。ほんの一瞬だったのだろうけれど、貴方が描いた軌跡は、ゆっくりとゆっくりと床に向かっていて、それはまさにスローモーションだった。長い長い、どうしようもなく長い時間をかけて貴方は落ちていった。ゆっくりとしたその時間、私の体はどうにかして貴方を掬い上げようと手を伸ばしかけ、けれど全然届かなくて、弾ける瞬間は目を背けた。くしゅっという音だけが耳まで届いた。

床にべちゃりと散らばった貴方は、透明な白身と薄いくすんだ黄身の卵だった。

貴方は卵だった。

だけど卵は貴方で、私たちは今までとても良い関係を築いてきていて、でも、貴方は割れて散らばってしまった。呆然とした。心臓を直接絞られているような胸の痛みを感じた。

数秒、散らばった貴方を前に跪き、眺めた。そして顔を貴方に近づけた。舐め取る。本能的に。とろりとして、ぬるりとして、とても冷たかった。

あの夜に貴方が「ひとつになりたい」と言っていたことを思い出した。そう言って私にキスをして、深く舌を絡めて、私の服を脱がせて自分も脱いで、一緒に狭いユニットバスでシャワーを浴びて、それから私のシングルベッドに行って、それから、それから。

私だって。私だって貴方と同じくらい貴方と「ひとつになりたい」と思った。思ったし、今も思っている。貴方と一緒に、ひとつに。

ぬるぬるした卵を舐めつくす。床に這わせた舌に貴方を感じる。無心で貴方を舐めて舐めて舐めて、そうしたら床から貴方の痕跡は白い殻しか残ってなくて、私はそれをかき集めて胸に抱いた。貴方との間に殻なんていう隔たりがなくなって、不思議と涙は出てこなかった。貴方の姿をもう見るできないのを哀しく思ったけれど、貴方と私はこれでいつでも一緒にいられるんだ、そうも思えて、僅かに安堵があったのかもしれない。

小さな小瓶に卵の殻を入れた。蓋を閉め、ベッドの枕元に置いた。その日はもう何もする気にもなれなくて、小瓶を手に、深く眠った。深く、深く。

卵との距離

著者 : kuresaki (c a g e)

原案 : みさとあきら (c a g e)

表紙デザイン : むーん (c a g e)

c a g e : we must Control our AGgressive Emotions.

<http://maruta.be/cage>

Copyright (C) 2011 c a g e All Rights Reserved.

powered by ブクログのパブー (株式会社paperboy&co.)